『比較論理学研究』第2号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書(2004)

ダルマキールティによる差異の定義について
ー'viruddhadharmādhyāsa'とは何かー

江崎　公児

0．我々は，日常的に，「この机とあの机は異なる」或いは「同じである」と考える。しかし，我々は，甲と乙という二者に関して，どのように差異性・同一性を確立しうるのであろうか。仏教哲学者のダルマキールティ（600–660年）の著名な定義によれば，諸物間の差異（bheda）とは，viruddhadharmādhyāsa である[1]。このダルマキールティによる差異の定義に関して，以下の問題点が指摘できる。

（1）なぜ差異がviruddhadharmādhyāsaであると言えるのか

（2）'adhyāsa'とは何か

（1）の問題は，最も根本的なものであるが，未だ明確にされていないと思われる。

また，（2）の問題はその訳語に関する問題である。諸先行研究では'viruddhadharmādhyāsa'は大別して「矛盾する属性の付託」[2]或いは「矛盾する属性の帰属」[3]という二種類に訳されており，どちらの訳語も，'adhyāsa' を'adhi√as'という動詞の派生語として解釈するものである[4]。

しかしながら，'viruddhadharmādhyāsa' の用例を検討すると，'adhyāsa' という語は，'adhi√as' の派生語ではなく，むしろ 'adhi√ās' という動詞からの派生語ではないかと考えられるのである。

また，ダルマキールティの全作品において'viruddhadharmādhyāsa' という語の用例はわずか三例見られるだけである。そして，'adhyāsa' という語も，'viruddhadharmādhyāsa' という組み合わせでしか用いられていないという点は注目すべきである。さらに，ダルマキールティの著作に対する注釈者達や後代の哲学者達によって，'viruddhadharmasaṃsarga' 等の語が'viruddhadharmādhyāsa' の同義語として用いられている用例が見られる点についても注目すべきである。

本稿の目的は，これらの問題点に対する解答を，主に，後代の仏教哲学者ジュニャーナシュリーミトラ（980–1030年）の解釈に依拠して提示することである。

1．まずダルマキールティの作品における'viruddhadharmādhyāsa' という語の用例を確認しておく。'viruddhadharmādhyāsa' という語は，以下に挙げるように，彼の初期の作品であるPVSVで二度，さらにPVin II において一度用いられているだけである。

PVSV 20,21–23 (=PVin II 38*,2–6): ayam eva khalu bhedo bhedahetur vā bhāvānāṃ viruddhadharmādhyāsaḥ kāraṇabhedaś ca / tau cen na bhedakau tadā na kasyacit kutaścid bheda ity ekaṃ dravyaṃ viśvaṃ syāt /

「実に，諸存在の間の差異（bheda）とは，まさにこの viruddhadharmādhyāsa であり，或いは差異の根拠とは，原因の差異である。もしそれら（viruddhadharmādhyāsaと原因の差異）が差異をもたら

[1] この定義は，*Nyāyakośa* にも採用されている。

[2] たとえば，'the superimposition of incompatible properties' (Jeson[2001: 425])，「相矛盾する属性の概念的付託」（船山[1989: 22]）等が挙げられる。

[3] たとえば，'the attribution of incompatible property' (Kyuma [1999: 228])，'[daß] (ihnen) widersprüchliche Beshaffenheiten zugeschrieben werden' (Steinkellner[1979: 110])，「矛盾する属性が付与されること」（渡辺[2004: 125]）が挙げられる。

[4] なお，Apte 等の辞書では，'adhyāsa'という語は'adhi√as'の派生語として挙げられており，'adhi√ās' から派生される名詞としては 'adhyāsana'のみが挙げられているということを指摘しておく。

また，'adhi√ās' からの派生語としての'adhyāsa' は次のように説明できる。動詞語根'√ās'にkṛt接辞GHaÑが導入されて'āsa' という語形が派生されるのと同様に，'adhyāsa' もまた，動詞語根'adhi√ās' に，kṛt接辞GHaÑが導入された語形である。

すものではないとすれば，どこにも，いかなる差異もないことになるであろう。従って，全ての事物が同一であることになるであろう」

PVSV 86,22–25: yo 'yam abhinnān sarvārthān manyate tasyāyam artheṣu buddhipratibhāsabhedo viruddhadharmādhyāsaś ca na syāt / sati vā tasminn abhede 'pi na kaścid bhedaḥ syāt /

「ここで或る人が全ての事物を異ならないものとして考えるならば，その人には，事物に関する，この，認識の持つ顕現の差異やviruddhadharmādhyāsaがないことになるであろう。或いは，それ（顕現の差異）があるとしても〔諸存在は〕異ならないと〔認める場合〕にも，いかなる差異もないことになるであろう」[5]

これらの箇所において[6]，ダルマキールティは，viruddhadharmādhyāsaが差異として認められる根拠を，「さもなければ，いかなる差異もないことになるであろう」と説明するだけである。

2．ところで，上記の引用において，属性はその基体を他の基体から差異化するもの (bhedaka) として機能することが前提となっていることは明らかである。この，属性はその基体を他の基体から差異化するという見解に関しては，バルトリハリ（約5世紀）に類似した記述が見られる。バルトリハリは VP 3.5.1 において次のように述べている。

saṃsargi bhedakaṃ yad yat savyāpāraṃ pratīyate / guṇatvaṃ paratantratvāt tasya śāstra udāhṛtam //

「結合関係にあり（saṃsargin），〔自己の関係項である＜実体＞を他の＜実体＞から〕区別し（bhedaka），ハタラキを持つ（savyāpāra）と理解されるものは何でも，他に依存するもの（paratantra）であるから＜属性＞（guṇa）である。このことは文法学において例証される」(訳は小林[1999: 50])

ここでバルトリハリは文法学上の属性 (guṇa) の定義を与えている。注目すべきは，属性の特徴として，（1）基体と結合関係にあること(saṃsargin)，（2）基体を他の基体から区別するものであること（bhedaka）という二点を挙げていることである。

この二点に注目すると，属性による基体の差異化は次のように説明できる。例えば，白牛と黒牛の場合，白牛と結合関係にある「白さ」という属性が，「白さ」と結びついていない黒牛から白牛を区別，即ち差異化する。

従って，差異の定義に関して，ダルマキールティは，「属性は自己と結合関係にある基体を他の基体から区別する」という見解をもとに'viruddhadharmādhyāsa'という語を差異の定義に用いていると考えられるのである。

そして，viruddhadharmādhyāsaに基づく事物の差異化は基本的に次のような形式をとる[7]。

[5] この箇所に対するカルナカゴーミンの注釈では，PVSVと異なる読みが示唆されている。PVSVṬ 329, 25–27: sati vā tasmin pratibhāsādibhede bhāvānām abhede ['bhyupagamyamāne na kvacid bhedaḥ syāt / lokapratītaś ca bhedaḥ /（「『或いはそれがある場合』即ち顕現等の差異がある場合に，諸存在が『異ならない』と認められるならば，『どこにも差異がないことになるであろう』。しかし，差異があることは世間で知られている」）

[6] PVin II に見られる 'viruddhadharmādhyāsa' という語は，PVSV 20,21–23との平行箇所に見られるものであり，実質的にはPVSVでのみ用いられていると考えてもよいかもしれない。

また，アルチャタはHBṬにおいて，これら二箇所に見られる定義をまとめて次のように述べている。「実に，諸存在の間の差異（bheda）とは，まさにこのviruddhadharmādhyāsaであり，或いは差異の根拠とは，原因の差異である。もしそれら（viruddhadharmādhyāsaと原因の差異）に基づく差異がないとすれば，〔それら以外に差異の〕別の根拠はないのだから，『全ての事物が同一であることになるであろう』云々〔の不合理な事柄〕が帰結するであろう。実に，顕現の差異もまた，相互無としては，viruddhadharmādhyāsaを越えることはない」（HBṬ 47,6–9: ayaṃ hi bhedo bhedahetur vā viruddhadharmādhyāsaḥ kāraṇa bhedaś ca / tataś cet na bhedaḥ, anyanimittābhāvāt ekaṃ dravyaṃ viśvaṃ syāt ityādi prasajyeta / pratibhāsabhedo 'pi hi itaretarābhāvarūpatayā viruddhadharmādhyāsatāṃ nātikrāmati /）

[7] この形式化は，以下の用例に基づくものである。

NKC 47, 20–22: yayor viruddhadharmādhyāsaḥ na tayos tādātmyam yathā jalānalayoḥ, viruddhadharmādhyāsaś ca cetanācetanarūpatayā śabdajñānayor iti /（「［遍充関係］およそ或る二者の間に viruddhadharmādhyāsa が〔成立する〕ならば，それら両者の間には同一性はない。例えば水と火のように。［主題所属性］〔それぞれ〕非精神性と精神性を本質とするから，言葉と認識の間には viruddhadharmādhyāsaが〔成立〕する。〔［結論］従って，言葉と認識の間には同一性はない〕」）

なお，ここでの（1）は基本形式を示している。そして，この基本形式に，先行研究における二種類の 'adhyāsa' 解釈を適用した場合の形式を（2）と（3）でそれぞれ示している。

(1) XとYが異なるとは，矛盾するAとBという二つの属性がそれぞれXとYにadhyāsaすることである。

(2) XとYが異なるとは，矛盾するAとBという二つの属性がそれぞれXとYに付託される（adhyāsa）ことである。

(3) XとYが異なるとは，矛盾するAとBという二つの属性がそれぞれXとYに帰属する（adhyāsa）ことである。

3． 以上でダルマキールティの定義の基本的な枠組みを提示した。次に問題となるのは，ダルマキールティによる差異の定義において，なぜ「矛盾する」(viruddha)という条件が付加されているのか，ということである。この点に関しては，以下のジュニャーナシュリーミトラの論述が参考になると考えられる。

まず，ジュニャーナシュリーミトラは次のように述べている。

JNA 27,4–6: bauddhaḥ kila [na] dharmāṇāṃ bhedamātreṇa dharmibhedam āha / kiṃ tu virodhena / anyathā kṛtakatvānityatvādīnām api dharmibhedam[8] ācakṣīta / anenāpi svayaṃ viruddhadharmādhyāsād ity akṣaram utthāpitam /

「伝統的に仏教徒は『諸属性の差異だけによって基体の差異がある』と主張しているのではなく『〔諸属性間の〕矛盾によって〔基体の差異がある〕』と主張しているのである。さもなければ，〔それぞれ異なる属性である〕所作性や無常性等の基体にも差異があると述べ〔なければならないことになってしまう〕。〔従って〕彼（ダルマキールティ）も，自ら，'viruddhadharmādhyāsāt' という語を与えたのである」[9]

ここでジュニャーナシュリーミトラは，なぜ単に異なる属性ではなく，矛盾する属性が基体を差異化するのか，ということを簡潔に説明している。

例えば壷のように，「所作性」と「無常性」という二つの異なる属性と結合している基体の場合にも「属性は自己と結合関係にある基体を他の基体から差異化する」という原則が当てはまるとすると，同一であるはずの壷が，それぞれ「所作性」を有する壷と「無常性」を有する壷であることになってしまう。従って，単に異なる属性ではなく，矛盾する属性が基体を差異化するのである。そして，このような「諸属性間の矛盾によって基体の差異がある」という見解自体は，仏教内部で伝承されており，それを 'viruddhadharmādhyāsa' という語を用いて術語化したのがダルマキールティである，ということがこのジュニャーナシュリーミトラの記述から読み取れる。

さらに，ジュニャーナシュリーミトラは次のように述べている。

JNA 39,11–20: śāstre 'pi hi viruddhadharmādhyāso bheda ukto, na virodhaḥ / virodhalakṣaṇaṃ tv anyat prasiddham eva / tādātmyaniṣedho 'pi viśeṣaṇānapekṣasvabhāvānupalambhād ukto na viruddhopalambhāt /

tad evaṃ bhāvābhāvalakṣaṇaviruddhadharmasaṃsargāt taddharmitvena bhāsamānau dharmāv eva bhinnau bhavata iti na tayor api dharmivastunor nānādharmayogamātreṇa bhedavārtā / yadā punas tathā bhidyamānāv eva dharmau yathoktaparasparapratidvandvinau bhavatas tadā taddharmiṇo 'pi bhedaḥ, nīlatvānīlatvabhāvābhāvadharmivat, ekakāryaṃ prati jananājananavac ca /

tasmād bhāvābhāvau sākṣād viruddhau [/] rūpajanakatvarasajanakatvalakṣaṇau dharmāv eva svadharmitvenābhāsamānau bhintaḥ / na tayor apy ādhāraṃ pracīnavirūpalakṣaṇam, svayaṃ virodhābhāvāt /

ata eva na bhinnau dṛśyate saḥ, ekakāryajanakājanakatve ca svayaṃ pratyanīkatayā svadharmiṇaṃ bhinta eva [/]

「実に，〔我々の〕学問体系では，『〔差異は〕矛盾である』と言われているのではなく『差異とはviruddhadharmādhyāsa である』と言われているのである。一方，他の矛盾の特徴については，まさ

[8] JNAでは'dharmabhedam'という読みが与えられているが，'dharmibhedam' に訂正する。

[9] Cf. 谷[2000: 349]：「仏教は単にダルマの差異によってダルミンの差異があると言ったのではない。そうではなくて，「両立不可能［なダルマ］によって［ダルミンの差異がある］」と言ったのである。もし，そうでないとすれば，「作られたものであること」と「無常性」等にもダルマの差異を見ることがあり［ダルミンが差異化されてしまうだろう］。このことによっても，自発的に両立不可能なダルマを置くから，という語が述べられたのである」

に既に確立されている[10]。同一性の否定もまた，＜矛盾するものの認識＞に基づいてではなく，限定要素に依存しない＜〔否定対象〕自体の非認識＞に基づいて述べたのである[11]。

従って，このように，矛盾する存在を特徴とする属性Xと非存在を特徴とする属性Yとの結合（bhāvābhāvalakṣaṇaviruddhadharmasaṃsarga）に基づいて，まさに，それら〔の属性XとY〕の基体として顕現しているまさにその二つの属性A・Bは区別される。従って，それら（属性X・Y）の基体であるもの（属性A・B）についても，単なる異なる属性との結びつきだけによって差異を語るのは適切ではない。しかし，そのように〔矛盾する存在を特徴とする属性Xと非存在を特徴とする属性Yとの結合に基づいて〕区別される二つの属性（A・B）が，既に述べたような相互に対立するもの（pratidvandvin）であるとすれば，それらの基体もまた異なる。青性という存在〔を特徴とする〕基体と非青性という非存在〔を特徴とする〕基体が異なるように。さらに，単一の結果に対する，〔それを〕生ぜしめるものと生ぜしめないものとが異なるように。

従って，存在と非存在は直接的に矛盾する。〔そして〕色を生ぜしめるものであることと味を生ぜしめるものであることを特徴とする二つの属性は，自身を基体とするものとして顕現している二つの〔基体〕を区別する。〔しかし〕それら（の属性）についても，〔概念知に顕現する〕以前の多様な相（prācīnavirūpa）を特徴とする一つの拠り所を区別することはない[12]。〔それらの属性〕自体は矛盾していないからである。

まさにこれゆえ，それ（基体）は異なる二つのものとは理解されない。そして，同一の結果を生ぜしめるものであることと生ぜしめないものであることは，それら自身で対立するもの（pratyanīka）としてそれら自身の基体をまさに区別するのである」

下線を付した箇所に注目すると，以下のように考えることができる。まず，ジュニャーナシュリーミトラは，基体間だけでなく，属性間の差異もまたviruddhadharmasaṃsargaに基づいていることを述べている。即ち，或る二つの属性AとBが異なると言えるのは，AとBという属性がそれぞれ相矛盾するXとYという属性と結合しているからである。そして，このような単に異なっているだけの二つの属性はそれらの基体間の差異を導くことはない。例えば，「色を生ぜしめるものであること」と「味を生ぜしめるものであること」という二つの属性は，それぞれ相矛盾する何らかの属性と結合していることによって，区別される。しかしながら，単一のものが味と味を生ぜしめることがあるのだから，単に異なっているだけの属性はそれぞれの基体を差異化することはないのである。従って，二つの属性は「対立するもの」（pratidvandvin, pratyanīka）でなければならないのである[13]。ここで言われている「対立するもの」とは，ジュニャーナシュリーミトラが挙げる「青性という存在や非青性という非存在」等の例のように，矛盾関係にあるもののことである。従って，ダルマキールティは差異の定義に関して，「矛盾する」という条件を加えていると考えられる。

4． 次に，‘adhyāsa’とは何かという問題について検討することにしたい。既に述べたように，諸先行研究では，‘adhyāsa’という語は‘adhi√as’

[10] JNA 38,15–17: yadvyavacchedena yasya vidhānaṃ yadvidhānena vā yasya vyavacchedo niyamena, tat tena pratiyoginā viruddham /（「Xの否定によって必ずYが肯定さるか，またはXの肯定によって必ずYが否定されるならば，Xは〔その〕対立項（pratiyogin）であるYと矛盾する」）

[11] JNAには見当たらない。ただ，カルナカゴーミンも次のように述べている。

PVSVṬ 37,8–10: nīlasyaikasyopalambhe [']nyasyādṛśyasyāpy upalambhamānasvabhāvatve sati tathaivopalambhaḥ syād ity evam upalabdhilakṣaṇaprāptatvam parāmṛśya tādātmyaṃ svabhāvānupalambhān niṣidhyate /

なお，「〔否定対象〕自体の非認識」と「〔否定対象と〕矛盾するものの認識」とは，ダルマキールティの説く三種の証因の内の一つ，「非認識」の下位分類である。渡辺[2002: 62]を参照。

[12] この‘ādhāraṃ prācīnavirūpalakṣaṇam’という句について，本稿では，事物の持つ様々な相（rūpa）が概念的に抽出される以前の事物として解釈した。即ち，ダルマキールティに代表される仏教認識論の枠組みで説明すると，例えば青い壺の場合，青い壺の知覚時には，その青い壺の持つ，青さや壺性等の属性は概念的に把握されない。これらの属性は，知覚に後続する「これは青い壺である」といった概念知の段階で初めて把握されるのである。

[13] ジュニャーナシュリーミトラのこのような「矛盾」解釈の詳細についてはKyuma[1999], Jeson[2001]を参照されたい。

の派生語として解釈されている。'adhi√as'の意味は，「上にのせる」，「付け加える」，「或るものが別のものへ属すると誤って考える」等である。しかしながら，次のような用例を見ると，このような解釈は適切ではないと考えられる[14]。

PVSVṬ 326,24: kiṃbhūtā naikayogakṣemā **viruddhadharmādhyāsitā** iti yāvat /

TSP on TS k.318: **viruddhadharmādhyāsitasyā**py ekatve bhedavyavahāroccheda eva syād iti viparyaye bādhakaṃ pramāṇam //

TSP on TS k.344: prayogaḥ — yau **parasparaparihārasthitadharmādhyāsitau** tau parasparabhinnau yathā rūpavedane mūrtatvāmūrtatvayukte [/] **vācyatvāvācyatvādiparasparaviruddhadharmādhyāsitau** ca skandhapudgalāv iti svabhāvahetuḥ //［可言性（vācyatva）と不可言性（avācyatva）］

TSP on TS k.593: tathā hi — yat **parasparaviruddhadharmādhyāsitaṃ** na tad ekaṃ bhavati, yathā gomahiṣam, upalabhyamānānupalabhyamānarūpaṃ [/] pihitādirūpeṇa ca **viruddhadharmādhyāsitaṃ** sthūlam iti vyāpakaviruddhopalabdhiḥ /［認識されるものであること（upalabhyamānarūpa）と認識されないものであること（anupalabhyamānarūpa）］

TSP on TS k.808: na hy **anyonyapratyanīkagrahaṇāgrahaṇadharmādhyāsitam** api sadekam iti yuktam abhidhātuṃ svacchacetasaḥ atiprasaṅgāt /［把握（grahaṇa）と非把握（agrahaṇa）］

TSP on TS 1122: **viruddhadharmādhyāsitasyā**py ekatve sarvaṃ viśvam ekam eva vastu syāt /

JNA 116,7–8: nanu kalasakuliśādau dharmayor eva virodhāt **tadadhyāsitasya** bhedamātram, kalasanāśau tu bhāvābhāvarūpatayā svayaṃ viruddhāv iti kathaṃ saha syātām /

これらの用例では，'adhi√ās' の過去分詞形である 'adhyāsita' が用いられている。これらの用例から明らかなように，'adhyāsa' という語は'adhi √ās' から派生された語であると考えることができる。

しかしながら，次のような用例も見られる。

ĀTV 384,19–385,1: sa hi na vāstavaḥ piṇḍānāṃ **viruddhadharmādhyastatvāt** /

NVTP 359,9–10: etena yad **viruddhadharmādhyastaṃ** na tad ekam ityādy api nirastam /

SDS 24,8–9: yad **viruddhadharmādhyastaṃ** tan nānā yathā śītoṣṇe / viruddhadharmādhyastaś cāyam iti jaladhare pratibandhasiddhiḥ /

これらの用例では，'adhi√as' の過去分詞形である'adhyasta'が用いられており，'adhyāsa' の語源として 'adhi√as' が想定されている。しかしながら，筆者の調べた限りでは，このような用例は仏教論書には見られない[15]。従って，あくまで仏教内部の伝統では，'adhyāsa' は'adhi√ās' からの派生語であると解釈されていると考えたい。

また，'adhyāsa' の解釈について，次のような用例にも注目すべきである。

PVSVṬ 89,16–17: yasmād ayam eva khalu lokapratīto bhedo bhāvānāṃ yo viruddhadharmādhyāso **viruddhadharmayogaḥ** /

NBṬ on NB III 19: na ca viruddhayor bhāvābhāvayor aikyaṃ yujyate, **viruddhadharmasaṃsargātmakatvād** ekatvābhāvasya /

TS k.1742: **viruddhadharmasaṅgaś** ca vastūnāṃ bhedalakṣaṇam / kathañcid anyatheṣṭo [']pi na bhedo nīlapītayoḥ //

NM II 319,3–4: **viruddhadharmayoge** 'pi yadi caikatvam iṣyate / anekakṣaṇayoge 'pi bhāva eka upeyatām //

NVTṬ 112,17–18: na ca janakatvājanakatvalakṣaṇo **viruddhadharmasaṃsargo** bhedahetur ity upapādayiṣyate kṣaṇabhaṅgabhaṅge /

JNA 376,15–16: sarvaś ca bhedasādhano vyavahārasādhana eva, **viruddhadharmasaṃsargam** antareṇa kvacid api bhedāsiddheḥ /

これらの用例では，'viruddhadharmādhyāsa'の同義語として'viruddhadharmasaṃsarga'等の語が用

[14] 以下に挙げる用例では，'viruddhadharmādhyāsa' に関する表現を太字で示している。また，矛盾関係にある二つのものを，可能なかぎり文脈から補って括弧内に示した。

[15] もっとも，'adhyasta' という語自体の用例は仏教論書にも見られる。しかしながら，本稿ではあくまで 'viruddhadharmādhyāsa' に関する用例しか扱っていないことをことわっておく。

いられている。これらの内，特に，カルナカゴーミンが‘viruddhadharmādhyāsa’という語を注釈する際に，「結合」(yoga) という語を用いている点（PVSVṬ 89,16–17: ...viruddhadharmādhyāso viruddhadharmayogaḥ //）は注目に値する[16]。もしも，ダルマキールティが‘adhyāsa’という語を「概念的付託」の意味で用いているとするならば，カルナカゴーミンもまた，‘samāropa’等の「概念的付託」を意味する語を用いるはずである。しかしながら，カルナカゴーミンは，実際には「結合」(yoga) という語を用いている。このことは，‘adhyāsa’という語が「概念的付託」という意味で用いられていないということを示唆しうる。

ただし，あくまでカルナカゴーミンがそのように解釈しているだけであって，ダルマキールティ自身は「概念的付託」等の意味で‘adhyāsa’という語を用いていると考えることも可能である。しかしながら，ダルマキールティ自身は彼の全作品中で，‘adhyāsa’という語を‘viruddhadharmādhyāsa’という組み合わせでしか用いていないということを考慮に入れると，ダルマキールティが「概念的付託」を意図して‘adhyāsa’という語を用いているとは考えにくい。つまり，もしも，ダルマキールティが諸事物の差異を「矛盾する〔二つの〕属性を〔それぞれの基体に〕概念的に付託すること」と定義する意図を持っていたとするならば，その定義を適用する際に，我々は恣意的に同一物を異なるものと見なすことが可能となってしまうからである。即ち，或るものXには，実際には，Yの持つ属性と矛盾する属性Aはないが，その属性Aと矛盾する属性BがXに付託されることによって，XとYが異なるものと見なされるということになってしまうからである。従って，‘viruddhadharmādhyāsa’における‘adhyāsa’という語は‘adhi√ās’の意味で用いられていると解釈する方が適切であると考えられるのである。

そして，‘adhi√ās’の意味には，「或るものの上に座る」，「横たわる」，「席や住居を占める」，「或る場所へ入り込む」，「宿る」，「或るものの中に存在する」，「或るものと共住する」等がある。従って，‘viruddhadharmādhyāsa’について以下のように考えることができる。或る二つの相矛盾する属性XとYがそれぞれの基体に存立する（adhyāsa）ならば，それぞれの基体は異なっている。本稿では，‘viruddhadharmādhyāsa’の訳語として，「矛盾する〔二つの〕属性が〔それぞれの基体に〕存立すること」を提案しておきたい。

5．ダルマキールティによる差異の定義に関して，次のように考えることができる。まず，定義の根底に「属性は自己と結合関係にある基体を他の基体から差異化する」という考えがある。ジュニャーナシュリーミトラの解釈に従うと，差異の定義に関するダルマキールティの貢献は，仏教内部で伝承されていた「諸属性の矛盾によって基体の差異がある」という見解を，彼が‘viruddhadharmādhyāsa’という語を用いて術語化したという点にある。そして，なぜ異なる属性ではなく矛盾する属性が基体の差異を導くのか，ということに関しては次のように考えられる。或る二つの属性が単に異なっている場合には，同一の壺における無常性と所作性の場合と同様に，それらの属性が同一の基体に属しうるために，必ずしもそれぞれの属性の基体を差異化するとは限らないのである。

また，‘viruddhadharmādhyāsa’という語に関する注釈者や後代の哲学者達の用例に注目すると，少なくとも，仏教内部では‘adhyāsa’という語は，‘adhi√as’の派生語としてではなく，‘adhi√ās’の派生語として解釈されている。

そして，‘viruddhadharmādhyāsa’の訳語「矛盾する〔二つの〕属性が〔それぞれの基体に〕存立すること」をふまえれば，ダルマキールティによる差異の定義は以下のように形式化される。

XとYが異なるとは，矛盾するAとBという属性がそれぞれXとYに存立することである。

[16] この点は，上述したバルトリハリによる属性の定義の内，「結合関係にあること」(saṃsargin)という項目とも対応していると考えられる。

略号及び参考文献

Apte *The Practical Sanskrit-English dictionary*, by V. S. Apte. Rev. and enl. ed. Poona 1957. Reprint, Kyoto: Rinsen Book Co., 1986.

ĀTV *Ātmatattvaviveka* (Udayana): *Ātmatattvaviveka, with the Commentaries of Śaṅkara Miśra, Bhagīratha Thakkura and Raghunātha Tārkikaśiromaṇī*, ed. by M.V.Dvivedin and P.L.S. Dravida, Calcutta: Bibiliotheca Indica No. 170, 1907–39 (reprint 1986).

HBṬ *Hetubinduṭākā* (Bhaṭṭa Arcaṭa): *Hetubinduṭīkā of Bhaṭṭa Arcaṭa with the sub-commentary entitled Āloka of Durveka Miśra*, ed. by Sukhlalji Sanghavi and Shri Jinavijayaji, Baroda: Gaekwad's Oriental Series No. CXIII, Oriental Institute, 1949.

JNA *Jñānaśrīmitranibandhāvāli* (Jñānaśrīmitra): *Jñānaśrīmitranibandhāvāli* (*Buddhist Philosophical Works of Jñānaśrīmitra*), ed. by Anantalal Thakur, Patna: Tibetan Sanskrit Works Series No. 5, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1987.

Kyuma, Taiken

1999 *Bheda* and *virodha, Dharmakīrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy*, ed. by S. Katsura, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, pp. 225–232.

NB *Nyāyabindu* (Dharmakīrti): See NBṬ.

NBṬ *Nyāyabinduṭīkā* (Dharmottara): *Nyāyabinduṭīkā with Dharmottarapradīpa*, ed. by D. Malvania, Patna: Tibetan Sanskrit Series Vol.2 , Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1971[2].

NKC *Nyāyakumudacandra* (Prabhācandra): *Nyāyakumudacandra of Śrīmat Prabhācandrācārya, A commentary on Bhaṭṭākalaṅkadeva's Laghīyastraya*, Vol. I, ed. by M. Kumar, Delhi: Sri Satguru Publications, 1991[2].

NM *Nyāyamañjarī* (Jayanta Bhaṭṭa): *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa with Ṭippaṇī—Nyāyasaurabha by the editor*, ed. by K.S. Varadacharya, Mysore: Oriental Research Institute, 1969.

NVTP *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* (Udayana): *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi of Udayanācārya*, ed. by Anantalal Thakur, New Delhi: Nyāyacaturgranthikā Vol. IV, Indian Council of Philosophical Research, 1996.

NVTṬ *Nyāyavārttikatātparyaṭīkā* (Vācaspatimiśra): *Nyāyavārttikatātparyaṭīkā of Vācaspatimiśra*, ed. by Anantalal Thakur, New Delhi: Nyāyacaturgranthikā Vol. III, Indian Council of Philosophical Research, 1996.

PVin II *Pramāṇaviniścaya* (Dharmakīrti), chapter 2 (Svārthānumāna): *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, zeites Kapitel: svārthānumānam*, Teil I, ed. by E. Steinkellner, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1973.

PVSV *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (Dharmakīrti): *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, The First Chapter with the Autocommentary*, ed. by R. Gnoli, Rome: Serie Orientale Roma 23, 1960.

PVSVṬ *Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā* (Karṇakagomin): *Ācārya-Dharmakīrteḥ Pramāṇavārttikam (svārthānumānaparicchedaḥ) svopajñavṛttyā, Karṇakagomiviracitayā taṭṭīkayā ca sahitam.* Allahabad, 1943. Reprint, under the title of *Karṇakagomin's commentary on the Pramāṇavārttikavṛtti of Dharmakīrti*, Kyoto: Rinsen Book Co., 1982.

SDS *Sarvadarśanasaṃgraha* (Sāyaṇa Mādhava): *Sarvadarśanasaṃgraha of Sāyaṇa Mādhava*, ed, by V. S. Abhyankar, Poona: Goverment Oriental Series Class A, No. 1, 1978.

Steinkellner, Ernst

1979 *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, zeites Kapitel: svārthānumānam*, Teil II, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1979.

TS *Tattvasaṃgra* (Śāntarakṣita): See TSP.

TSP *Tattvasaṃgrahapañjikā* (Kamalaśīla): *Tattvasaṃgraha of ācārya Shāntarakṣita with the commentary 'pañjikā' of shri Kamalashīla*, Vol. I, II, ed. by S. D. Shastri, Varanasi: Bauddha Bharati Series 1, 2, 1968.

VP *Vākyapadīya* (Bhartṛhari): *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the commentary of Helārāja; Kāṇḍa III, part 1.* ed. by K. A. Subrahmania Iyer, Poona: Deccan College Monograph Series 21, Deccan College, 1963.

Woo, Jeson
2001 Incompatibility and the proof of the Buddhist theory of momentariness, *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 29, pp. 423–434.

小林芳恵
1999 「バルトリハリ言語哲学における＜実体＞と＜属性＞」（『哲学　第51集』pp.47–60）

谷貞志
2000 『刹那滅の研究』春秋社

船山徹
1989 「ダルマキールティの「本質」論—bhāvaとsvabhāva—」（『南都仏教　第63号』pp. 1–43）

渡辺俊和
2002 「Dharmakīrti の非認識論—相反関係を中心に—」（『南都仏教　第81号』pp. 54–80）
2004 「因果関係決定における帰謬および「差異」の概念」（『哲学　第56集』pp. 119–131）

（えざき　こうじ，広島大学大学院
［インド哲学］）